

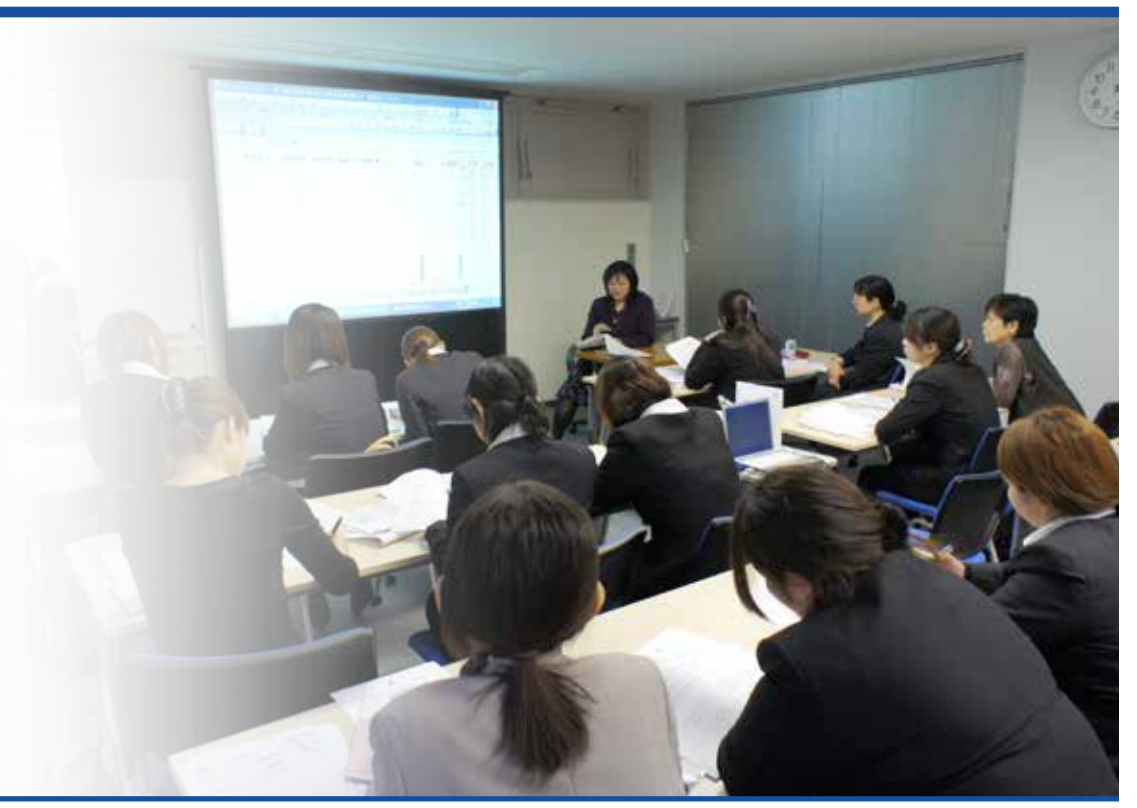
Vol. 175

2018.3.6

理事長トーク Top Interview

## 健育会グループにおける看護研究について

医療法人社団 健育会 理事長 竹川節男



2018年3月10日に行われる看護・リハビリテーション研究会は、今年で12回目を迎えます。今回の理事長トークでは看護研究会のご指導を長年いただいている、横浜市立大学 医学部 看護学科 教授 叶谷 由佳先生（以下、敬称略）と健育会グループ看護部のサポートに携わっている森智美さんの2人に参加してもらい、健育会グループの看護研究これまでと今後への期待について話しました。

## 株式会社ヘルスケアシステムズ時代の思い出

理事長：叶谷先生との出会いは20年くらい前になるでしょうか。私が「医療の質の向上と運営の効率性が共存する新しい病院運営のあり方を提案し、日本の医療サービスの発展に貢献したい」という強い思いで株式会社ヘルスケアシステムズの立ち上げた際、入社して頂いたことでしたね。

叶 谷：はい、そうです。当時、私は東京大学大学院の医学系研究科健康科学・看護学専攻博士課程に在籍していて、「マグネットホスピタル」などの研究をしていました。「マグネットホスピタル」とは、患者さんから支持され、また看護師など医療職の離職も少ない、まるで磁石のように人を引き付ける病院のことです。そのような病院を実現するためにはどのような看護管理や病院経営が必要なのかを研究し、その研究を通じて学んだことを生かして働くことができれば、と職を探していた時に、お世話になっている先輩からヘルスケアシステムズという高い志を持った会社が立ち上がるという話を聞いたのがきっかけでした。「医療はサービス業であり、サービスを提供するのは‘人’である」「その‘人’がプロフェッショナルに集中できる職場環境を整えることが大切である」というような理事長のお考えがヘルスケアシステムズを紹介するパンフレットに書かれていたと記憶しています。「まさに自分の考えとマッチしている！」と感じたことがきっかけで、入社させていただきました。



理事長：叶谷先生には、当時、各病院の看護管理向上に向けて精力的に働いていただいたように記憶しています。もう、叶谷先生がヘルスケアシステムズで働いていたことを知る職員も少なくなっただと思いますが、その頃の思い出で印象深いものはありますか？



叶 谷：本部の人間として、現場の一つ熱川温泉病院に入らせていただいたのが印象的でした。その当時の熱川温泉病院では、なぜか全身に皮膚疾患のある患者さんが多く、軟膏などを塗るケアにすごく時間がかかっていたのです。それを間近で見て、お茶を使った‘部分浴’が皮膚疾患に有効であるという研究があったのを思い出して改善に結びつければと伝えたところ、病院の皆さんが「患者さんの中には全身が痒いという方がいらっしゃるの、入浴剤のように湯船にお茶がらを入れたらどうか」と発想し、ディレクターが周辺の旅館に声がけしてお茶がらを集め、それを看護助手さんが乾燥させて、日本手拭いで手縫いで作った袋に入れ、入浴時に患者さんの浴槽に入れたんです。すると、緑茶に含まれる成分によって、患者さんの皮膚疾患がみるみる改善され、肌が綺麗になりました。患者さんは痒みから解放され、また看護師や介護職のケアにかかる負担も減りました。そして、前年の同月とその年の薬の薬のコストを比較すると、やはり下がっていました。

この事例から患者さんに効果的なケアを行うことが、働くものの負担減に繋がるだけでなく、コストも削減されて経営改善に繋がるという結果が得られ、当時、このことを雑誌や海外の学会でも発表させていただきました。そして何より個人的には、現場で働く皆さんの「少しでも患者さんのために良いことをしたい」という思いからくる発想力と、行動力を目の当たりにする貴重な経験をさせていただきました。

私は、ヘルスケアシステムズにいた後にまた研究職に戻ったのですが、その時の体験はその後に生きていて感じています。

## 医療専門職に必要な論理的思考



理事長：私は、質の高い医療を継続的に提供していくために「医療専門職は、論理的思考・統計的な視点を身につけた科学者であるべきである」と常々考えています。

私は大学病院に勤めていた時代に、学会発表を多い年で一年に4回行った経験がありますが、学会発表というのは日常業務にプラスして発表の準備などを進めなければならず、非常に多忙で大変でした。しかし振り返ってみれば、沢山の先生や諸先輩方にアドバイスを頂きながら発表をまとめていく過程は、論理的思考や統計的な視点を磨く良い機会となりました。またそのような感性を持つことで、患者さんを診る目や業務請負全体に対する視野を広げることができ、そのことを日常業務の質の向上に結びつけることができることを体験してきました。この経験から、私は看護研究・リハビリテーション研究をはじめとした研究活動を、グループ内で推奨しています。

叶 谷：論理的思考を学ぶことは、私も大切だと感じています。

私は大学で教育に関わっていますので、毎年、学生に最新の知識を教え、卒業研究を指導し、そして卒業生を現場に送り出しています。卒業してすぐは、新米で全く役に立たず、頭でっかちですし、知識も2-3年も経てばすぐに古いものになってしまいます。しかし、理論や物事の枠組み、研究の手法をしっかり学んでいるので、現場で経験を積み重ねていくうちに、目の前で起こっている現象を理論的に理解したり、また疑問に思ったことをすぐに研究に結びつけていくことができます。そのため大学で看護を学んだ学生は「はじめは頭でっかちで何もできないけど、成長の伸び代がある」と病院関係者から言われることが多いのです。

一方、健育会グループでは看護学生時代に研究活動に携わる機会がなかった人でも、入職した後に学ぶ機会がたくさん与えられており、論理的思考を磨いて成長してゆけることは素晴らしいことだと思います。論理的思考を学ぶことで、日々の気づきを見落とさず、皆に役立つ知識にまで高めることができるのだと考えています。



## 健育会グループにおける看護研究の発展

理事長：看護・リハビリテーション研究会も今年で12回目となります。近年では、発表内容のレベルも上がってきたと感じていますし、昨年はグループの看護部門全体で23演題を、外部の学会で発表することができました。健育会グループの看護研究がここまで成長したのは、叶谷先生のご指導のおかげだと感じています。

叶 谷：そのようにご評価いただき恐縮です。忙しい日常業務の中、看護師の皆さんが研究活動を継続していくことはなかなか難しいことです。先ほどお話しいただいたように、研究活動を推進し応援してくださる理事長がいらっしゃるからこそ、成し得ている活動だと感じています。また逆に毎年研究の過程で関わらせて頂き、現場で頑張っている皆さんならではの気づき、視点にとっても刺激を受けています。

研究活動に関わっていて最近特に感じていることは、継続的に活動していることが実を結び、また各病院に研究を指導できるリーダー的な存在の方が育っていて、それが研究活動のレベルアップに繋がっていることです。

森：私もそのように思います。看護研究の勉強会は年間で6回（TV会議、本部集合研修）、1回 3時間で開催しており、叶谷先生に毎回丁寧なご指導を頂いています。また、ここ2-3年の話ですが、各地域において近隣病院が集まって行う看護の研究会に健育会グループの病院もそれぞれの地域で参加し、発表を行っています。すると、研究にしっかりと取り組んでいることが他の病院に伝わり一目をおかれることも多く、それが看護師の自信に繋がっているという話も、看護部長から聞いています。



叶 谷：研究活動においては、各地域でリーダーシップをとっていただける実力を、健育会グループのどの病院もお持ちだと感じています。

特に、学会発表という急性期の病院は多いのですが、リハビリ、療養病床、地域包括ケア病床の研究はあまり数がないのが現状です。急性期病院と違って、看護職であっても介護職と一緒に働くことが前提ですから、健育会グループにおける研究も「看護だけではなく様々な職種と手を組んでどのようにケアを向上させていくか」という視点のものが自ずと多くなっています。しかし、そのような視点での研究はこれまであまりないので、これからの超高齢社会において、この分野の発展は非常にニーズが高いと感じています。最近では、学会で研究が採択され、発表に結びついていますし、これからも先駆的に取り組んだ研究の成果を発信していただき、健育会グループの力をアピールして欲しいと考えています。



森：先生からご指導いただいた研究で、花川病院が第10回看護・リハビリテーション研究会（2016年3月）で発表した「回復期リハビリテーションにおける服薬自己管理開始の判断基準と管理方法の指標」は、「同じリハビリテーション病院で苦労している人たちに向けてこの研究内容を発信したい」との思いから、雑誌投稿という形でMCメディカ出版の「リハビリナース」という雑誌に実際に投稿し、査読も通って2017年No.5に掲載されました。このようなことも、看護研究を続けてきた成果だと感じています。



理事長：グループ内でも、当初は研究活動を行うことが「義務でやらされるもの」だったのが、最近では「やるのが当たり前」になってきているのを感じています。

森さんが話してくれた花川病院の例もそうですが、たくさんの研究活動を積み重ねていく中で、学んだことを病院/施設として患者さんやご利用者、また社会に還元していくという文化が根付いてきているということで、それは大変良いことだと感じています。

## 第12回 看護・リハビリテーション研究会への期待

叶 谷：この週末には、第12回 看護・リハビリテーション研究会が行われますね。研究については1年を通じて関わらせて頂いていますが、これまでの勉強会では大学の卒業研究に関わるのと同じように厳しい視点で意見を言わせて頂いています。その厳しい指導に必死についてきてくれた成果を見ることができるので、大変楽しみにしています。



理事長：先生のご指導のおかげで研究内容のレベルはどんどん上がってきていますので、私が今年注目したいのはフロアからの質問です。

例えば「理論的構成がおかしいのではないか」「研究目的から考えるとデータ分析方法に一貫性がないのではないか」など、論理的思考を学んだからこそその質問が出ることを期待しています。

叶 谷：理事長はさすがにお厳しいですね。この理事長トークを皆さん読まれて、気を引き締めて研究会に参加されるのではないのでしょうか。

理事長：そうあって欲しいと願っています。第12回 看護・リハビリテーション研究会に期待しています。

